インターネット版

白夜

第 10 号

2023 年 8 月

北海道スウェーデン協会

この「白夜」前号は、本年３月の発行で、それから半年近く経ちました。実は、現在準備中の内容もあるのですが、さすがに少し間が空きすぎということで、穴埋めに私が書いた二つの記事で、新しい号が出るまでの繋ぎの号をお送りしたいと思います。空白の時間を解消するための応急的処置ですので、全くもって読んでくださいということではないのです。

内容も、第一号でも取り上げたヘヴィメタル＆プログレッシブ・ロック。以前の白夜の音楽特集号に掲載した事務局による文の中では、「私もプログレについて書きたいけれど、皆さんみたいな音楽知識がないから」と自重することを宣言したのに、今回はつい書いてしまいました。まあ、こんなこともスウェーデンに関係する話なのだ、ということで、ご容赦を。

事務局長　目黒聖直

スウェーデン出身元タカラジェンヌ

以前、クラシック音楽の番組「題名のない音楽会」で、ある女性バイオリニストが、３曲をそれぞれラップ歌手、ジャズバンド、ヘヴィメタルバンドと一緒に演奏するという企画をやっていた。いわば異業種交流の面白さを狙った、ということなのだろうが、ラップはいざ知らず、メタルに関してはバイオリンという楽器は割とよく使われていて、全然新奇なことではない。クラシックしか知らない担当者が企画したのだから、仕方ないことではあるが。

バイオリニストが正式メンバーになっているバンドで頭に浮かぶものとしては、お隣フィンランドのコルピクラーニやフランスのアダージョがあるが、スウェーデンではバイオリニストを抱えているバンドはすぐには思いつかない。ただ、一時期イングヴェイ・マルムスティーンのバンドのベーシストだったスヴァンテ・ヘンリソン（Svante Henryson）は、クラシックのチェロ演奏がむしろ本業であって、マルムスティーンのアルバムでもペースとチェロの担当とクレジットされている。

と、書いたところで、日本のLIV MOON（リブムーン）の最新作にもバイオリニストが参加していたことを思い出した。

LIV MOON は、そもそも AKANE LIV（アカネリブ）というシンガーがメタルをやりたくて始めたプロジェクトで、ボーカリストとキーボーディスト（名大工学部出の俊才）以外のメンバーは作品ごとに流動的な印象もある。で、今作では新たに国立音大出身という女性バイオリニストが加わっているというわけだ。

ところで、このAKANE LIVというシンガーはスウェーデン出身の元宝塚ジェンヌなのである。当時は神月茜（かみづきあかね）という雪組男役だった彼女は、本名をリヴ・カミンスキーといい、父がポーランド系スウェーデン人、母は韓国と日本のハーフ。ヨーテボリ生まれの日本育ちだそうだ。

「Our Stories」WLKR-0071

宝塚退団後、ミュージカル女優等として活躍していたが、ナイトウィッシュ（フィンランド）というオペラを学んだ女性シンガーを擁するバンドの「THE PHANTOM OF THE OPERA」に衝撃を受け、シンフォニックメタルが自分にとって理想の音楽であると気づいたという。この曲、勿論、あのアンドリュー・ロイド・ウェバーの名曲のカバーだから、ミュージカル女優の彼女が心を奪われたのも当然か。

このLIV MOONの最新作は、タイトルが「Our

Stories」。全９曲で、２曲目は、ウの字も出てこないが、明らかにウクライナ侵略をテーマにした曲。６曲目の「El Dorado」は、イントロが聖飢魔 II の有名な同名異曲と少し似ているのがご愛敬か。

４曲目。一般にメタルにはラブソングはあまりなく、しかも名曲となると極めて稀なのだが、この曲はその域に達している。ラブソングというと浮ついた感じもするから、これは壮大な愛の歌と言った方がいい。曲の中から溢れ出てくる情熱のほとばしりや情念のうねりが聴く者に襲いかかってくる。胸を突かれて痛い。サビの部分での激しいドラムを聴けば、この曲がメタルという表現形式でなければ成り立ちえなかったことがわかる。そして、ラストの「The Lament」。もともとはインスト曲だったものに詩の朗読とスキャットを加えたというが、実に感動的だ。「メタルが感動的って理解不能」と思う方には絶対に聴いてみて欲しい。

でも、この素晴らしい音楽が、テレビから流れることは絶対にないんだろうな。

スウェーデンの悲劇の歌姫

プログレッシブ・ロックは、クラシック、ジャズ、民俗音楽等との融合を図ったロックで、複雑な曲構成と高い演奏技術を特徴としている。1970 年代前半には高い人気を得た。ちなみに、メタルとは共通点が多く、一括りにして語られることも多い互いに兄弟みたいな音楽だ。

一般に、プログレ初心者へのお勧めとしては、名盤の誉れ高い

- エマーソン・レイク＆パーマー（ELP）「恐怖の頭脳改革」又は「タルカス」
- イエス「危機」

とされるが、いずれも難解過ぎて、一般の人にはなかなか理解されないと思う。絵画鑑賞なら、最初は古典派やロマン派から入るべきで、いきなりキュービズムや抽象画の名作を見ても素人にはなかなか理解できないのと同じだ。ただし、一言加えておくなら、アルバム「タルカス」のタイトルトラックは、オーケストラ用に編曲されて、NHK 大河ドラマ『平清盛』のオープニング曲として使用されたので、そのメロディーを耳にしたことのある人は多いだろう。

というわけで、筆者も ELP やイエスのアルバムも何枚か持ってはいるが、日ごろ愛聴するのは、断然、ルネッサンス（英）、オルメ（伊）、そして、スウェーデンの Pär Lindh Project である。このバンド、日本ではパル・リンダー・プロジェクトと表記されるが、これはレコード会社のスウェーデン人の人名への理解の完全なる欠如ゆえだ。筆者はスウェーデン語を話せないが、彼らのライブアルバムでのアナウンスを聞いても、書くならペール・リンド・プロジェクトとすべきだと思う。

というわけで、以下ではそう記述するが、「ペール・リンド・プロジェクト」ではインターネットでも絶対にヒットしないので念のため。

彼らのファーストアルバム「ゴシック・インプレッション」が出たのは 90 年代半ばだった。ロックから一時期クラシック演奏家に転身していたキーボード奏者のリンドが、プログレ界に戻って完成させたアルバムだ。プロジェクトというように、固定したバンドメンバーによるのではく、十数人の演奏家が曲によって入ったり入らなかったりして、全曲に参加しているのはリンドのみというアルバムである。これが傑作で、当時、アルゼンチンでは、プログレ史上の全アルバムの中で（確か「恐怖の頭脳改革」等とともに）ベストテンに選出された。最初の二分くらいの映画音楽のような静かなインスト曲に続く二曲目が素晴らしい。途中で演奏に乗りながら詩が朗読されるパートがあるのだが、ここがなんとも恰好いいのだ。

このアルバムは、ストックホルムからダーラナ地方に向かう途中にあるエンショーピング（Enköping）のスタジオで録音されており、チ

ャーチオルガンもその地の教会のものを弾いている。リンドもそこに住んでいたのかもしれない。

続く「Mundus Incompertus」(1997 年）というラテン語のタイトルのアルバムには、なんと演奏時間が 27 分近い曲も収録されている。前半はメタルにも近いが、後半はピアノソロ、バイオリンソロ、コラール、チャーチオルガンの演奏、なんでもありの 27 分だ。このアルバムからは、５人組のバンド形態になっている。ボーカルは、前作でも何曲かで歌っていたマグダレーナ・ヘグベリ（Magdarena Hegberg)。正直なところ、アニー・ハズラム（ルネッサンス）の歌唱には見劣りするが、バイオリンやピアノも担当するマルチプレイヤーだ。ちなみに、リンドとヘグベリ以外は、メタルバンドの出身。

2001 年には、これもラテン語の「Veni Vidi Vici」を発表。ローマの有名な言葉「来た、見た、勝った」である。邦題は、「幻想のノスタルジア」。これも前２作に劣らず素晴らしい。

彼らのスタジオ録音アルバム

しかし、何故か、このあと長い沈黙に入る。そして、待望の新作が届いたのは、十年近く経った 2010 年のこと。しかし、リンド以外のメンバーは交代していてトリオ編成となっており、しかもボーカルは男性になっていた。そして、日本語版 CD の解説を読んで、長い沈黙の理由がわかった。愕然とした。

マグダレーナ・ヘグベリ（結婚して Berg になっていたのだが）の脳に癌が見つかり、短からぬ闘病の末、2007 年の 12 月に僅か 35 歳でこの世を去ったというのだ。このアルバムには「With Death Unreconciled」という素晴らしい曲が収録されているが、彼女に捧げられたとのクレジットを見ると涙なしには聴けない。

ただ、それ以外の曲は私には精彩を欠いているように思われた。

以降、ペール・リンド・プロジェクトは新作を発表していない。

（了）